

第五章

ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスと市場動態概念

5.1. 序文

メンガーが展開したパラダイムの本質を巧みにまとめ上げ、経済学の新たな分野に応用し、20世紀オーストリア学思想の発展に誰よりも寄与した人物は、ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスであった。実際、ミーゼスは、「オーストリア学思想の違い、及び、それに付与されるべき永遠の高名は正に、『行為なき経済』、いわゆる『経済均衡』ではない、経済行為論を発展させたことにある。」と強調している（ミーゼス、1978：36）。ミーゼスはこの市場動態概念をオーストリア経済学の分析焦点が届いていなかった新たな領域に誰よりも適切に導入し、貨幣、信用、景気循環論の分野を切り開き、市場調整の原動力といえる洗練された企業的機能論を開拓し、手法論及び、均衡に基づく思想に代わるオーストリア派の動態理論の基盤を築いた。これら全て非常に魅力的で実り多い研究事業であった。ミーゼスのこの貢献によって、オーストリア経済学思想は大いに繁栄し、1990年代、ハイエクを始めとする彼の弟子たちが中心となってオーストリア経済学は復興する。

5.2. 略伝

ルートヴィヒ・エードラー・フォン・ミーゼスは1881年9月29日、当時のオーストリアハンガリー帝国、レンベルク市に生まれた。ミーゼスの出生地は今日ウクライナの独立共和国に属するリヴィウという名になっている。ルートヴィヒの父親はチューリヒの工学校で学び、鉄道建設専門の優秀な技師となった。ルートヴィヒは、3人兄弟の長兄であった。弟の一人は幼い頃死去し、もう一人の弟、リチャードは著名な數学者、論理実証主義者になったが、この弟とはルートヴィヒは生涯疎遠な関係が続いた。

ミーゼスが経済学者になったきっかけは、1903年のクリスマスの時期にカール・メンガーの「政治経済の原理」を読んだことであったと、彼自身が回想録で語っている（ミーゼス、1978：33）。1906年2月20日、法学博士号を取得した彼は、ウィーンの大学でエウゲン・バーム=バヴェルクの経済学講義を1914年まで受けていた。ミーゼスはすぐに、J. A. シュンペーターと共に、最も優秀な受講生として頭角を現すようになった。J. A. シュンペーターのことをミーゼスは、オーストリア経済学特有の思想から離れ、常に「あつと言わせる」ことに拘った軽薄で激しく混乱した、新古典派の科学主義の網に引っ掛かったような理論家だと見ていた。

1906年教鞭をとり始めたミーゼスはまず、ウィーン商業女子学校で経済学を6年間教え、その後1913年からウィーン大学の講師として20年間勤務した。1934年、スイス、ジュネーブ高等国際研究の国際経済学教授に就任。第二次世界大戦が始まったころ、ヒトラーから逃れ、米国に移住。米国籍を得た後、ニューヨーク大学で教員として1969年の定年まで勤務した。

1920年から1934年にかけて、ウィーン商工会議所経済部部長兼書記総長であったミーゼスは、会議所の中で有名な経済講義(Privastseminar)を開いていたが、これがやがて国内政治の経済政策に大きな影響を持つようになった。毎週金曜日の午後に開かれていたこのセミナーには、ミーゼスの指導の下、研究論文に取り組んでいた生徒たちだけでなく、ミーゼスから招待された著名な経済学者が世界中から集まっていた。そのドイツ語圏の受講生の中には、フリードリヒA.ハイエク、フリッツ・マッハルプ、ゴットフリート・フォン・ハーバー、オスカー・モーガンスター、ポールL.M.ローゼンスタイン=ロダン、フェリックス・カウフマン(アルフレッド)シュルツ、リチャード・フォン・シュトリグル、カール・メンガー(オーストリア経済学創設者カール・メンガーの息子、数学者)、エリック・フェーゲリンなどが毎回出席していた。また、英国と米国からは、ライオネル・ロビンズ、ヒュー・ゲーツケル、ラグナー・ヌルクセ、アルバートG.ハートなどが参加していた。その後、米国に渡ったミーゼスは、1948年秋から1969年春ごろまで、毎週木曜日午後にニューヨーク大学で再びセミナーを開催した。この新たなセミナーには、マレーN.ロスバードおよびイスラエルM.カーズナーといった教授たちが顔を揃えた。

F.A.ハイエクの請願により、ニューヨーク大学、そしてフライブルク大学(ブライスガウ、ドイツ)からルートヴィヒ・フォン・ミーゼスに名誉博士号が贈られた。同様に、1962年、オーストリア共和国科学芸術名誉賞授与、さらに、1969年、アメリカ経済学学会から「特別評議員(Distinguished Fellow)」に任命された。ミーゼスは、経済学に関する著書22冊、何百もの論文(ベッティーナ・ビアン・グリーブスとロバート・マギーによって二冊の大巻に纏められた)を著した後、1973年10月10日ニューヨークにて死去した(彼最大の弟子、F.A.ハイエクが経済学への貢献によりノーベル経済学賞を受賞するちょうど一年前)(ベッティーナ・ビアン・グリーブス、ロバート・マギー、1993、1995)。

20世紀の約70年間という長期の研究活動を続けられる幸運に恵まれたミーゼスは、世界的にも一躍名高い経済学者となった。既にヘンリーC.シモンスは1944年、「現在の経済学界の最も偉大な教授だ。」とミーゼスを高く評している。また、シカゴ学派の実証主義経済学者のミルトン・フリードマンでさえ、ミーゼスの理論に深く共鳴し、ミーゼスについてその没後すぐに、「歴史上最も優れた経済学者の一人だった。」と回想している(ミーゼス、1995:1)。同じく、ノーベル経済学賞を受賞したモーリス・アレも、「ミーゼスは並外れた頭脳の持ち主であった。彼が経済学に残した研究成果はどれも全て第一級のものである。」と記している(アレ、1989:307)。さらに、ロビンズは、学術的自叙伝の中でミーゼスについて次のように口ずさんでいる。「政治的偏見によって盲目でない者が、ミーゼスの経済学研究や偉大な経済論文、ヒューマン・アクションを読んで、どうして直ぐ、彼のその稀な本質と最高の知識欲を感じないのか理解に苦しむ(ロビンズ、1971:108)。」

5.3. 貨幣、信用、景気循環論

ベーム=バヴェルクの講義に参加し始めた頃の研究活動初期の時代からミーゼスは既に、メンガーが促した貨幣、信用分野への主観的経済概念の適用を発展させること、そして、ベーム=バヴェルクが研究し続けたように貨幣、信用操作が資本財構造に与える影響を分析しなければならない重要性を認識していた。1921年、ミーゼスが31歳のとき初めて「貨幣と信用論」を刊行すると（ミーゼス、1997）、この作品は瞬く間にヨーロッパ全域における貨幣理論のスタンダード論文となった。

貨幣分野におけるこのミーゼスの最初の研究発表は、主観思想及び動態的概念を貨幣分野に適用し、それを限界効用論の基盤にさせることで、オーストリア経済学思想を一層飛躍させることに繋がった。また、ミーゼスは、限界効用論の貨幣への適用という、それまで一見解明不可能と思われていた循環論法を解決して見せた。実際、価格、あるいは貨幣購買力は需要と供給で決まる：その貨幣の需要とは、人間が行うものであり、それは貨幣が提供する直接的効用によるものではなく、正に貨幣がもつ購買力次第で決まる。この一見循環論法と言える問題をミーゼスは、貨幣溯及定理によって解決したのである（ミーゼス、1995：491-500）。この定理によると、貨幣需要とは、今日の貨幣購買力で決まるのではなく（そうであるなら、前述の循環論法のようになる）、昨日の貨幣の購買力に対する経験を基にした行為者の知識によって決まるものだと考える。また、昨日の貨幣購買力は、一昨日の購買力に対する知識を基に定まった貨幣需要によって決まる。このように順次辿っていくと、歴史上、特定の物品（金や銀）が初めて交換手段として求められるようになった時点まで到達するというわけである。従って、貨幣溯及定理とは、貨幣の進化的誕生に関するメンガー理論の遡及的適用に他ならない。

既述したように、「貨幣と信用論」は貨幣分野のスタンダード作品となり、ヨーロッパ大陸の有名な大学全てで使われるようになった。ここで、あえて「ヨーロッパ大陸」と表現した理由は、残念ながら英語圏諸国にはあまり影響が及ばず、その理由は1930年代に入るまで当論文は英語に翻訳されなかつたからである。その一例として、ケインズは、「新聞などを通してしか耳にすることがなかつたミーゼスやハイエクの作品が、自分の研究初期の思考時期に知ることができ、自分のドイツ語能力がこんなに乏しいものでなかつたなら（ドイツ語では既に知識のあることしか完全に理解できないため、新しい思想などはその言語が大きな障壁になる）、彼らの研究はもっと参考にしただろう。」と悔やんでいる（ケインズ、1996：181）。

このミーゼスの論文には、初步的ではあるものの、すばらしい景気循環の学説が含まれており、これがやがて、「オーストリア景気循環理論」という名で世界中に知れ渡るようになった。実際、ミーゼスは通貨学派の貨幣論を前述したベーム=バヴェルクの資本と利子の主観的理論に適応し、現金（流通手段）貯蓄の裏付けがない信用と預金の創造拡張は、中央銀行が率いる部分準備制を基にした銀行システムに周期の増大と貨幣供給の無秩序を招くだけでなく、信用の「無」からの創造が人為的に下げられた利子率に反映し、必然的

に、持続不可能な生産プロセスの強引な「延長」を招き、資本が過剰に不適切に使われるという論理に既に目を向けている。

ミーゼスの主張によると、信用拡張によるあらゆるインフレプロセスの拡大によって、自発的に遅かれ早かれ、経済危機や景気後退という反動が容赦なく起こり、大量の失業が溢れ、それまで投資された全ての資源は清算や再配分されるようになり、投資事業の失敗が明白になるという。従って、ミーゼスは、このような景気循環を除去するために、要求払い預金に対する準備金率100%の銀行システムの必要性を訴え、著書の中で最後に次のように断言している。「信用システムから人間の影響を排除するための唯一の方法は、その後の全ての流通手段発行を無くすことであるのは明らかだ。ピール法の基本的理念は、銀行預金残高という形の信用発行を当時のイギリスよりもっと完璧に禁止条項に導入することで持続する。・・・近代の為替機構が存続しなければならないと考えるのは間違いだ。それ自体が自ら破壊する芽を持っている。流通手段の創造は不可避的に破綻へと向かう（ミーゼス1997：377-379）。」

それまでの考え方では、限界効用理論は貨幣に適用できないため、ミクロ、マクロ経済は分離され、全ての貨幣理論は一般物価水準のような集計概念を基に出来上がるものだと思われていたが、ミーゼスのこの循環論によって、経済理論の「ミクロ」と「マクロ」の両面を含む一つの概念が初めて可能になった。さらに、ミーゼスは、近代の部分準備制銀行システムが存立してから市場に影響が及んだ好不況繰り返し現象について、60年代のインフレ大不況及び最近のアジア金融経済危機を含め証明できる分析ツールを生み出した（ウエルタ・デ・ソト、1998：375-392）。従って、ミーゼスが創設の中心となり、そこにF. A. ハイエクを初代所長に指名したオーストリア学経済研究所が、第一次世界大戦後に続いた「幸せ」の時代の無謀な貨幣・信用政策の悲惨な結末である1929年の世界大恐慌を予測できた唯一の研究機関であったという事実は何ら不思議でもない（スコーセン、1993：247-248）。そしてまた、ミーゼスとその弟子たちが、次項で解説する社会主义の不可能性についての理論と並行して循環論を磨き上げた事実にも注目すべきである。要するに、危機に関するオーストリア経済学理論とは、財政、信用、貨幣分野における政府の干渉が経済の実際的生産構造に不調和を招き、体系的な歪み（同時または異時点間の）を発生させるという証明に他ならないと言える。

5.4. 社会主義不可能性理論

三つ目のミーゼスの偉大な業績は社会主义の不可能性に関する理論である。

オーストリア学思想の主観的見地から見れば、社会主义の不可能性は当然であり、新古典学派がそれに気付かなかつたとすれば、それは、彼らの誤った手法論の設定が原因であり、特にそれは、必要な情報が全て把握されていることを前提に均衡状態のモデル化を描いたためである。「生産手段が公共所有された社会において、経済運営の合理的秩序は可能だという偽りは、古典経済学や、主観理論の基本的定理や、それから生まれる最終的な結果を理解できない多くの近代経済学者の頑固なまでの無能さによって作られた間違った

価値論がその源泉である。事実上、このような古典経済学の誤りのみで社会主義思想を繁栄させようとしているのだ。」とミーゼスは批判している（ミーゼス、1995：250）。

全ての動機、評価、知識の原点が行為者人間の創造能力にあるとするなら、社会主義や、それほど強くない干渉主義国家のような、行為者人間の自由に対する強引な規制に基づくあらゆる体制は、それぞれの行為者の頭に社会調整に必要な情報が現れないようにさせるシステムになるとミーゼスは考えた。経済計算とは、行為者が選べる様々な代替可能案の評価結果の概算査定だと解釈できるが、それには初めから何らかの情報の準備が求められ、社会主義体制のような強制を基にしたシステムでは不可能なことであり、多かれ少なかれ、一般的ないわゆる任意的交換手段と理解される貨幣の自由な使用や任意的交換（そこに個人の評価が反映、発見、創造される）が阻害されてしまうという問題点にミーゼスは注目した。

経済計算の分析及び、経済理論分野におけるその重要性はミーゼス思想の基本的概念の一部を構成する。ミーゼスの最大の業績といえば、おそらくこの分野で、個人的評価（序数）の主観的空间と貨幣単位で定められた市場価格査定（経済計算の基本的領域）の外的空間はどのように繋がっているのか理論的に証明できたことだろう。この二つの空間の”架け橋”は、双方の異なった主観的評価によって促された個人間の交換行為が現れたときに確立される。それが市場の貨幣価格、または実際に特定量存在する貨幣単位の交換比率の歴史に反映され、後に、それを企業家が将来起こり得る変化を予測し、決断を下す（経済計算）ための貴重な情報として扱う。もし、人間の行動の自由が強引に阻止されると、個人間の任意的交換は実現することではなく、すると、情報創造の主観的及び直接評価の空間（序数）と、価格の外的空間（基本領域）との架け橋あるいは繋がりは壊れることになり、経済計算は完全に不可能になることは明白である（ロツツバード、1991：64-45）。

従って、ミーゼスは、自由な市場、自由な市場価格、自由な貨幣価格が存在しない社会では、必要な（自由裁量ではない）情報をもつて進められる計測という意味においての「合理的な」経済計算は一切行われないと断言する。

社会主義に対するこのミーゼスの基本的思想は、体系化し、1922年ドイツ語で刊行された社会主義体制に関する大論文の初版の中に含まれ、後に英語、フランス語、そして、「社会主義論：経済・社会研究」というタイトルでスペイン語にも翻訳された（ミーゼス、1989）。

このミーゼスの社会主義論はヨーロッパ諸国で大きな反響を得ることになった。その結果、F.A.ハイエクと肩を並べる、当初ファビアン社会派論者として知られていたヴィルヘルム・レプケやライオネル・ロビンズなどはミーゼスの著書を熟読した後、思想を転換し、リベラリズム主義者になったといわれている。さらにこの論文は、「社会主義経済計算不可能性論争」という、オーストリア学派が巻き込まれる第三の大論争（方法論論争、資本概念論争に続く）の始まりでもあった。十数年も続いたこの議論は経済思想史の中で最も重要な論争の一つとされ、オーストリア経済学の特質を一層磨き発展させることになった。さらに、今日一般的に、元社会主義論者たちでさえ、この社会主義不可能性論争はオーストリア学派の勝利で終わったことを認めている。その一例として、ロバートL.ハイルブロ

ナーは、「ミーゼスが正しかった。・・・社会主義は今世紀の大きな悲劇であった。」と記している（ハイルブロナー、1990:1110-1111）。また、オスカー・ロンギの弟子たち及び、ブルース、ラスキなどもロンギを始めとする社会主義論者たちは、「オーストリア学派の主張に対し、十分な反論ができなかった。」と記述している（ブルース、ラスキ、1985:60; ウエルタ・デ・ソト、1992）。

要するに、本項で強調すべき点は、社会主義思想全体の思考的過ちに対して、ミーゼスが唱える社会主義不可能性の主張は、社会を制御するための必要な情報を統制機関が取得することは無理なことから、強制的制度によって社会を編成することは不可能だという合理的論拠である。従って、ミーゼスの理論は、社会主義の実際的不可能性に関する論証なのである。または、理論とは現実の数量的、形式的、抽象的分析に他ならず、しかし、決して現実との繋がりを失うことなく、むしろ逆に、現実世界に現れる状態とプロセスと同じように重要であるべき研究であることから、言い換えれば、それは換称による論証だと言えよう。従って、「理論」と「均衡分析」が区別できない、誤った概念の新古典学派の多くの有名な学者のような、均衡形式モデルや「選択の純粹論理」の視点からの社会主義の不可能性が、ミーゼスの分析だと捉えるのは大きな誤解でしかない。実際、1920年既にミーゼスは自身の定理が均衡モデルに適用できないことを細心の注意を払いながら明快に言い表している。それは、均衡モデルには必要な全ての情報が用意されているという前提があるが、そうすると、社会主義における根本的経済問題はab initio（最初から）解決済みということになることから、新古典主義者たちには何も問題にすることはないという結論になる。しかし、ミーゼスは、問題は逆で、統制機関が特定の経済計画に有利または不利な制令や命令を施行したとき、それが果たして正しい効果を生んだのかどうか知るために必要な情報が不足するなら、経済計算や予測など一切できるはずがないという。もし、統制機関が必要な全ての情報を持ち、さらに、それらが変化しないものだとしたら、経済計算の問題は全く考慮されなくなるのは当然だろう。なぜなら、始めからそのような問題は存在しないと考える訳だから。故に、ミーゼスは次のように言及している。「均衡状態の経済には経済計算は要らない。そのような静態的経済は常に同じ状況が繰り返されるだろうから。もし、一つの静態的な社会主義経済の出発点を考えるとすると、競争力ある経済の最終状態が思い描かれるかもしれない。しかし、この可能性は想像でしかなく、情報が常に変化する現実社会には均衡した状態が現れるることは不可能なことから、静態モデルとは、実生活で発生する状況には何ら繋がりのない理論的仮定話に過ぎない（ミーゼス、1935:109）。」

従って、ミーゼスの論説は社会主義の論理的不可能性に関する理論的証明であるが、現実からかけ離れた非人間的な「全知全能」の何者かによる完全均衡の環境で行われる機械的行為に関して構築された論理や学説ではなく、実際の動態的かつ自発的な人間行為と社会プロセスに関する論拠と理論に基づいている。さらに、ミーゼスは社会主義論の中で明確にこう指摘している。「静止した社会では、経済計算を必要とする解決すべき課題は、既に解決済みということであるから課題はもはや存在しない。時々若干間違って使われるが、広く浸透した表現ではこう言う。『経済計算は動態的経済の問題であり、静態的経済の問題ではない』（ミーゼス、1989:120-121）。」このミーゼスの言葉は、メンガーが始ま、ベーム=バヴェルクが育て、第三世代のミーゼス自身が開花させたオーストリア経済学思想の理念に完全に当てはまるものである。よって、均衡に経済計算を全く必要とする

ことなく、社会主義経済の不可能性定理に気付いたのは、オーストリア派の経済学者だけであったとしても何ら不思議なことではなく、当初から彼らは、部分的または全体的な機械論均衡モデルの研究のではなく、市場に現れる実際の動態的プロセスの理論分析に科学的研究の焦点を当て続けたのである。

故に、シカゴ学派のように、新古典学派の経済学者たちは、理論と均衡モデルの静態研究を混同し、必要な情報が全て用意されたモデルを前提とするかぎり、社会主義における理論的問題を考慮することはない。例えば再度、シカゴ学派創設者、フランク・H・ナイトを挙げると、彼は、「社会主義は社会政治心理学で議論すべきであるが、経済理論に関してはあまり語るべきものはない（ナイト、1938：267-268）。」とまで明言している。同じ過ちに陥ったのは、オスカー・ロンギおよび彼の弟子（リッピンコット、ディキンソン、ダービン、テーラー、ラーナー）など新古典派社会主義経済学者たちである。彼らはワルラスの連立方程式手法はミーゼスが提起した経済調和の問題解決策の存在を証明しているから、ミーゼスの均衡経済研究の「立証」は「間違いだ」と反論している。彼ら均衡論者たちは誰一人、ミーゼスとハイエクの動態的概念の視点を受け入れなかつたために、この二人の経済学者が何を追及したのか理解せず、二人が解決した理論的課題に対する認識が完全に欠けている。おそらく、実際経済の世界で発生する真に重要な様々な問題に対して高名な学者たちが培った研究成果を遮断してしまった新古典主義、実証主義方法論が招いた壊滅的現象の数々をより明らか表した科学は、経済学において他にないだろう。

5.5. 企業的機能

あらゆる社会プロセスの中心的役割を不可避的に担うのは人間だという考えは経済学分野におけるミーゼスの第四の基本的貢献である。実際、経済とは、経済人、マックス・ヴェーバー、が提唱したように、当初、歴史的個体の理念型を中心に現れ、そして、メンガードの主観的概念によって、人間の相互作用、行動（ミーゼスの定義では人間行為学）に関する一般理論に発展していったものだということにミーゼスは気付いた。ミーゼスは、人間行為、相互作用の基本的性質及びその影響を総括的経済論文、ヒューマン・アクションの基本的研究課題に位置付けながら詳細に分析した（ミーゼス、1995）。彼は企業的機能の定理を構築しながら、全ての人間行為には、周りに現れる利潤の主観的機会を発見し、創造し、そのため行動するという能力、いわゆる企業的、投機的要素が含まれていることに気付いた。

そして、企業的機能の基本的要素はその創造力であることをミーゼスはこのように明確に示した。「行為と生産を指揮するものは人間の創造的頭脳だけである（ミーゼス、1995：169）。」同様に、リスクは何ももたらさないのではなく、企業的利益とは無関係な生産プロセスの一コストである場合、企業的利益は単にリスク想定から生まれるという巷に広がった嘘を激しく批判した（ミーゼス、1995：953-954）。また、企業的機能とは、最大化決定によって市場で売買できる一般的生産要素だという基本的に誤った概念にも言及している。逆に、「ビジネスの世界で勝利するためには学位など何ら必要としない。学校は型通りに仕事ができる人材を育てるが、企業家は生まない。企業家になる方法は教えられる

ものではない。人間は、チャンスを生かし、空を満たすことで企業家に育つ。」とミーゼスは述べている。

企業的機能に関するミーゼスのこの理論は、ニューヨーク大学経済学教授、イスラエル・M・カーズナーによって近年大いに繁栄したが、ミーゼスの優秀な生徒であった彼のこの業績については後の第七章で触ることにしよう。

また、人間の企業的能力とは、目的や手段に関する新たな情報を常に追求し、創造するだけの能力ではなく、強制的に干渉することさえなければ、自発的に現れ、持続する調整型トレンドを理解する力でもある。この企業的機能の調整能力は、既に第一、二章でも解説したように、不变性の概念を基にした、物理学やその他自然科学などの他分野から影響された、貧弱なコピーである、科学的分析の悪癖（数学的、統計学的な）に囚われず、経済理論の論理集大成の構築を可能にさせる（ミロウスキ、1991）。

5.6. 政治経済の手法：理論と歴史

ミーゼスの第五の基本的貢献と言えば、彼は政治経済手法論の最も系統的かつ総合的なオーストリア学経済学者だという点にある。ミーゼスによると、社会科学、いわゆる人間行為学は大きく二つに分けられる：人間行動学（人間行為の一般理論、これから最も発達したのが経済学）と歴史。人間行動学とは、「人間行為」の概念カテゴリーの適用であり、そのために、人間行為の基本的な行動定理の推定を単に必要とする。よって、経済理論は行為の概念、カテゴリーから先天的、演繹的に構築される。これは、行為の概念の中に含意された、わずかなくつかの基本的公理を起点にして行われる。人間は目的を考え、選び、それに達するために適切な手段を探すが、それら全て自らの価値基準によるという意味において、最も重要なのは、正に、行為のカテゴリーである。手段が少ない場合、最も高く評価した目的の追求を第一に行い、その次に、それほど急がない他の目的を追求する（「限界効用遞減の法則」）というのが、もう一つの公理である。第三に、異時点で、取得できる同じ性質の二つの財があるとすれば、直ぐに得られる方の財が必ず選ばれる（時間選好の法則ということである）。その他の人間行為概念の基本的要素は、行為は常に時間の中で進み、時間は希少であり、人々はより満足できる状態に移行するために実行することである。

ミーゼスはこれら公理を起点とし、演繹的論理思考に基づいた現実社会に現れる様々な問題を中心とした経済理論を構築し、重要な経験事実を演繹的論理思考の連鎖の適切な場所に導入していった。このようにして、人間行為論が示す、明解に認識され、解釈された経験事実がのちに、現実社会への最も重要な定理を確立するために、この理論に「推測」という形で再利用されていった。

従って、経験とは、特定の問題へ研究者の好奇心が向かうようにするためにだけ使われるものだとミーゼスは言う。私たちが何を研究すべきなのか教えてはくれるが、その知識を探求するための手法的道筋は示してくれていない。いずれにせよ、明らかにしておくべ

きことは第一に、人間行為の概念、定理をあらかじめ理解することなく、現実の現象は何も分からぬということ；第二に、経験とも言える、思考だけが、過去に存在しない何らかの仮定の人間行為や問題に対する研究へと導き、それが将来重要なものになるという考え方を抱かせる。

人間行為学の中のもう一つの領域は歴史である。歴史とは人間行為に関する経験的事象の収集と体系的研究に他ならない。従って、過去における人間行為の特定の内容に関するものである。

故に、歴史家は現実を解釈できる理論体系をあらかじめ持ちながら研究に努めなければならない。そしてさらに、研究する過去の出来事において、どの部分が最も重要なのか見極める優れた特別な判定が必要であり（Verstehen、いわゆる理解社会学）、この判断力こそが研究を真の芸術に変える。

この理解における評価的判断は、特定の行為に影響する環境の変化をその都度行為者自身が予測しなければならないときに必要となる。しかし、経済においては、「科学的な」予測、いわゆる自然科学によって実施されるような予測はできないとミーゼスは言う。経済学の法則は純粋な演繹的論理であり、「質的」な予測だけしか使われない。このような経済の予測は物理学または工学の分野で行われるものとは全く異なり、将来の具体的現象に関する正確な予測として扱われない。日常生活の中で人間は、将来どのような変化が現れるのかについて常に特定の信念に基づき、計画し、行動を起こすしかるべきである。そのような「予測」を行うために、人間は理論的知識をその道具として使い、それに照らして即時現実の事実を解釈、理解、言い換えれば、関係する特定の状況に関する知識を必ず使いながら、どの変化現象が行為に影響するのか「予測」する。

従って、将来の事象に対して人間が向き合う不確実性は非常に大きい。もし、人間が行動を起こし、具体的に何かを始めるとき、価値判断と動機に関する深い理論と豊富な経験を持ってすれば、その不確実性は消すことはできないとしても、小さくすることは可能である。よって、特定の人間が他の者よりも将来の行為を企業的に計画することに長けているということは経験的事象によるのである。具体的には、将来における事実の移り変わりを考えながら行動する者全てが企業家だといえる。この観点から、私たちは皆企業家であり、全ての人間は将来起こり得ることを意識しながら日々行動を起こさなければならないとミーゼスは説く。よって、一般的に人間には生まれつき企業家的能力が備わっており、特定の現象の変化を予測するために、自らの理論的及び経験的知識を活用する。経済学者という科学者は、具体的な数量的、地政学的、時間的な予測を出すことは決してできない。もし、経済学者がそのような予測を表すようなことがあれば、即刻、経済学の領域から離れ、人間や企業に関する予測の分野に移ることを当然意味する。自然科学などが提示する同じようなレベルの科学的予測を経済学にも強いることは、現実世界及び人間性全般に対する大きな無知であり、特に誤った経済学の方法論的概念だとミーゼスは述べている（ミーゼス、1995：142）。

5.7. 結論

ルートヴィヒ・フォン・ミーゼスは20世紀のオーストリア学派の最も偉大な経済学者として知られる。さらに彼は、オーストリア学派を代表する総合的、系統的経済論文を完成させ、その中で経済学の分野に数々の重要な研究を綿密に生涯をかけて展開させた。その作品はヒューマン・アクション：経済論文として紹介され、初版のドイツ語版は、第二次世界大戦勃発直前、ミーゼスがジュネーブで教鞭を取っていたときに執筆したものである。英語版が初めて刊行されたのは、今から50年余り前の1949年9月14日であった。それから後、主観的概念とオーストリア学派動態的概念の視点から経済学の本質を追求した、この千ページにも及ぶ大作は、英語、ドイツ語を始め、

イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、日本語、中国語、等々、計14か国語で出版され、特に、一般的経済問題、経済学手法論に関する学術論文及び、社会主义経済研究の中で最も広く引用される著書の一つとなった。今日までおよそ15万部以上出版されたであろう、この経済学における正真正銘の一大傑作をオーストリア学派についてより深く学びたいと思う方は迷うことなく一読されることをお勧めする（ウエルタ・デ・ソト、1995：1-1vii； サレルノ、1999）。